

『社研月報』一思い出と小さな注文

研究参与 森 宏

70年代末6月の所員総会で、「研究会担当はいったい何をしていたんだ」と激しく詰問された。無理もない、前年度の定例研究会はたった一回しかなかったのだから。多い時は一ヶ月に二つも三つも重なることがある昨今の事情からは想像もつかないことだろう。出席者の1人が、「入所間もない人間に研究会をやらせても、誰がどんな研究をしているのかまだ分らないのだから」と庇ってくださり、事なきを得た。謙虚に反省し総会後は、キャンパスや職員バスの中で人の顔を見れば、闇雲に「何かやりませんか」と声をかけ、次の年の総会は無事であった。恐らくその次の年度、編集担当をおおせつかった。『月報』は5-6ヶ月遅れで、『年報』も実際に出るのは夏休みにずれ込むこともあった。何とかしなければならなかった。研究会担当で培った闇雲の押しで、誰かれとなく声をかけ、いったん「何か書きましょう」の言質を取るや、毎週のように督促を繰り返した。

ある年の所員総会で、別の所員から「今度の編集担当は横柄である。第一催促の仕方が悪い。女房にまで督促するのだから」と詰られたことがある。しかし待ってください。10月中旬締め切りの年報原稿が、12月はじめになってキャンセルされたり、「あと2週間」、今度は「来週末」の繰り返して、正月を越そうとしていたのですから。言い返したかったが、編集長非難の声に事務局長も同感の様子だったので、謝ることにした。今でも口惜しい思いである。

編集は結構長い間やらせていただいた。所員一同の協力というより、編集担当の作り笑いと強引な押しに「負けてくださった」数人の所員のおかげで、程なく『月報』も『年報』も期限内刊行にこぎつけることになった。その後は編集担当の努力というより、全学的な研究の充実と所員の投稿機運の高まりから、月報にはもったいないような密度の高い原稿が集まるようになっていく。ご同慶の至りである。

『社研月報』のいい点は、何よりも早いことである。経済学部『論集』は、定年前に亡くなられた加藤佑治氏のご尽力で、年に3号出るようになったが、原稿提出から刊行まで、おそいときは半年近くかかることがある。年2号の場合はもっとかかるだろう。『月報』の場合は著者1人の努力次第で、時に3校まで見ても、一ヶ月以内で上がる。しかも用紙・印刷がともに美麗である。欧米のジャーナルに出すと、査読者のコメントが返ってくるのが半年後、リライトして幸いアクセプトされても、原稿提出から刊行まで2-3年かかるのは珍しくない。学会で点数を稼ぐ気のない人間には、本研究所『月報』はとても有り難いアウトレットである。

とは言っても、わが『月報』のあり方に、もう少し何かがあっても良い。その一つは、レフェ

リー査読ではないが、編集者が、できれば機械的な持ち回りでなく、専門に近い方が初校よりむしろ原稿の段階で目を通して、気付いた箇所をコメントするくらいの方があってもよいのではなかろうか。以前と違い原稿用紙の手書き原稿でなく、ワープロ打ち出し原稿なら、印刷初校と変わらない。古くからタイプ原稿が普通であった欧米の大学や研究所では、どこかに出す前に仲間内のレビューが慣行的になされていた。

大分以前、NZ留学から帰国して、雑文を書かせていただいたが（『月報』No. 353）、1年間のNZ生活でかなりフラストレーションが溜まっていたので、副題「Does a Kiwi Need a Vacation?」「芯のあるごはん」からも窺えるように、内容はかなりNZに批判的で、過激な言葉が使われていた。その時の編集担当者は、遠慮がちに幾個所かを指摘してくださったが、そのコメントを受け入れたことで、後から読み返してみると、一般の読者にはずいぶん読み易くなったのではないかと感じられる。

2-3年前に柄になく、O. J. 裁判の「無罪」判決について私見を書かせていただいた（『月報』No. 473）、その時の編集担当者は、幾箇所かの明らかなミスは指摘してくださったが、ご本人が納得できない箇所は、後記に一言二言遠慮がちに述べただけであった。後に本にして大学以外の知人にも読んでもらったところ、同じような疑問を感じられた人が少なくないのを知った。もう少し説明を加えておけば、読者全員ではないにしろ、私の言いたかったことに対する疑念は少なからず解消するはずであった。この正月に実の兄から、「1-2行そのことが書かれてあれば、もっと抵抗なく読めたのに。結構多くの方が僕と同じような疑問を感じたと思うよ」の小言ももらった。

特定の論文をあげるのは適切でないかもしれないが、昨年、米国のニューイングランド地域の「まちづくり」に関する実態調査の報告が載った。ニュージャージー州には親しい知人がおり、以前ラドガス大学で市街地周辺の農地転用の勉強をしたいと思っていただけだから、早速興味深く読ませていただいた。しかしその論文のどこを読んでも、私程度にあの地域に土地勘のある人間でも、その町のロケーションがはっきりしない。ニューヨーク市起点の簡単な地図が一枚添えてあったならば、理解はもっと深まったと思われる。専門家の間では有名なところで（そのために調査に出かけた）、ついつい他の人も知っているに違いないと想定されたのであろう。地名に限らず分析上の概念に関しても、自分たち仲間の常識は他の人の常識と思いがちである。

誤解のないように繰り返すが、査読者のコメントに「きちんと対応して修正しないと」（『農業経済研究』76巻3号「編集委員会だより」）掲載に至らないと言うのではない。ほんの仲間内の感想程度で、聴くもよし、聴かずともよしなのである。